

1. 事務局からのお知らせ

(1) 事務局の連絡先について

日本フランス語学会の事務局が、京都産業大学に移ってから一年がたちました。いろいろと不手際もあったと思いますが、会員みなさまの御協力感謝いたします。京都産業大学では、宮下明信・荒井文雄の二人の編集委員が事務を担当しています。事務局の住所等は以下の通りです。今年から電子メールでのご連絡を受け付けます。

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山

京都産業大学外国語教育研究センター事務室内

日本フランス語学会事務局

Fax. : 075-705-1448 Tel. : 075-705-1770 (宮下) 075-705-1826 (荒井)

e-mail : amiyashアットマークcc.kyoto-su.ac.jp (宮下) araiアットマークcc.kyoto-su.ac.jp (荒井)

(電話は宮下・荒井の研究室に直通です。不在の時間も多いため、ファックスまたはメールでの連絡のほうが確実かと思われます。)

(2) 会費の納入について

本年度の会費をまだ納入されていない方は、ご送金くださいますようお願いいたします。個人会費の送金は郵便振替で、下記の口座に振り込みをお願いしています。

郵便振替口座番号 00160-6-56308

会費未納の方には学会誌『フランス語学研究』とともに、請求書をお送りしますが、2年以上会費を滞納された方には学会誌はお送りしていません。また、4年間会費納入のない方は、退会扱いとなりますのでご注意ください。なお、『フランス語学研究』のバックナンバー購入ご希望の方は、フランス図書が取扱業者になっておりますのでそちらにお問い合わせ下さい。

(3) 住所変更などについて

住所(連絡先)・所属機関等の変更がある場合は、ご面倒でもなるべく早く事務局にお知らせください。住所変更については事務局の荒井が担当しています。

(4) 例会案内通知について

例会通知は、はがきを送って下さった方にお送りしています。通知をご希望の方は、官製はがきにご自分の住所・氏名を表書きしたものを10枚ほど上記事務局までお送り下さい。なお、ご自分の宛名には「○○○○行」とせず、「○○○○様」として下さい。発送の際の手間を軽減するためです。よろしくお祈りいたします。

(5) 編集委員の交代について

本年度は、次の方が編集委員を辞任しました。

藤田知子(神田外国語大学)

また、次の方が編集委員に新任されました。
大久保伸子（茨城大学）

(6) 論文寄贈その他のお願い

フランス語学に関するもので、最近（過去3～4年）発表された論文がございましたら、抜き刷りを事務局までお送り下さい。『フランス語学研究』の「寄贈論文」欄にタイトルを掲載します。また、同じく過去3～4年に発表された修士論文についても、執筆者・タイトル・大学名（提出先）・年度をお知らせ下さい。もちろん、関係者の方からの連絡でも結構です。ご協力をお願いします。
(荒井 文雄)

2. 例会案内

次回以降の例会の予定は以下のとおりです（題名等は変更の可能性があります）。
10月は大阪大学で、他は青山学院大学（原則として5号館530教室）で午後3時～6時の開催となります。

~~~~~

7月4日（土）

中尾和美「未定」

藤田知子「最上級構文について」

9月26日（土）（5号館522教室に変更）

赤松弥生 「フランス語空間前置詞の意味とその拡張」

中尾 浩 「デジタル的差異とアナログ的差異」

10月23日（金）

発表者2名未定

11月21日（土）

三藤博，他一名未定

12月5日（土）

佐藤淳一「未定」、他一名未定

~~~~~

例会案内は事務局に葉書をお預けになった方には通知を発送していますが、それ以外に『月刊・言語』（大修館）、『ふらんす』（白水社）、メーリングリスト frenchling にも掲載されますので、ご参照ください。

またこれら雑誌案内、葉書案内に必要ですので、例会発表者には発表の3月くらい前にタイトル（仮題でも可）をお問い合わせいたします。ハンドアウトは通常の例会では50部程度、文学会と同時期の例会、および12月の例会では60部程度ご準備ください。

1998年度、1999年度例会発表者を募集しています。希望者はお近くの編集委員、運営委員、または事務局までお申し出ください。
(阿部 宏)

3. 運営・企画担当委員より

1998年4月より関東側の運営委員が、阿部（正）・鳥居（副）より、大久保（正）・Dhorne（副）に交替しました。関西側は引き続き大木・三藤が担当しております。このメンバーで例会、海外の研究者の特別発表、シンポジウムなどを企画いたします。

昨年度は Marc Wilmet 氏を招いての特別発表、また Henri Besse 氏、Claude Hagege 氏の講演会を共催いたしました。また今年度は5月例会で、高等研究院の Irene Tamba 氏を迎えて、

France Dhorne 氏との共同発表が行われました。

昨年の日本フランス文学会春季大会（学習院大学）の折りには、関西側運営委員の企画でシンポジウム「半過去の諸問題」が開催されました。パネリストのフランス語教育、フランス語学、フランス文学の研究者間で活発な議論が行われ、会員以外の方も含めて沢山の参加をいただきました。またこれは今年度4月のパネルディスカッション「半過去再考」へと発展しました。今年度のシンポジウムとしては、「メタファーをめぐる諸問題」（関東側企画）というテーマで現在準備が進められています。これはメタファーについて認知言語学、詩学、フランス語学の研究者が討論を行うものです。会員の皆様が今このニューズレターを目にされているのは、このシンポジウム会場の中かもしれません。

その他の例会については、昨年度については『フランス語学研究』の「例会案内」、今年度については上記の「例会案内」をご覧ください。また学会運営の方法についてご意見や提言のある方は、お近くの編集委員までお申し出ください（編集委員の構成は『フランス語学研究』巻末をご参照のこと）。

来年度も、例会に加えて、シンポジウム、また共通テーマによる発表、海外の研究者を招いての特別発表などを企画予定です。アイデアをお持ちの方は運営委員にご連絡ください。また会員の皆様の例会への積極的な参加をよろしく願います。（阿部 宏）

4. 編集責任者だより

『フランス語学研究』第32号がお手もとに届いたことと思います。今回の「執筆要項」では、論文レジュメが所定の書式で別紙に10行程度と明記されています。次の33号からレジュメを論文の冒頭に持ってくるという編集委員会の方針に基づくものです。投稿論文の掲載通知に同封する「執筆要項補遺」で、さらに具体的なレジュメの書き方を取り決めることになっていますので、どうぞよろしく願います。

32号では、編集責任の役割が首都圏以外の大学に移り、その点では少し不安を抱えながら、この任に就きました。歴代の編集責任者から、投稿される方、会員の方が非常に協力的なので安心して言われていましたが、結果は、まさにその通りでした。こちらの勝手な依頼や、時には不手際にもかかわらず、大勢の方のご協力で完成にこぎ着けることが出来ました。

また32号から研究社印刷の本誌担当が気鋭の十二村健二氏となりました。決して余裕があるわけではない本誌編集の日程の中、迅速・的確に各行程を進めて下さり感謝しております。

次号の編集は東郷雄二氏（京都大学）がご担当なさいます。会員の皆さんの活発な投稿によって本誌がますます充実して行くことを祈っております。（佐藤 正明）

フランス語学が研究できる大学（院）

この欄では、国内の大学、大学院でフランス語学が研究できるところを順次紹介しています。今回は青山学院大学と東京大学です。

青山学院大学大学院文学研究科 フランス文学・語学専攻

学部はフランス文学科です。語学コース、文学コースといったはっきりしたコース分けはありませんが、3年生になってから、語学をやりたい者は語学の授業を中心に単位を取って必要な単位を揃えることができます。文学についても同様です。また会話や文化を中心に単位を

取ることもできます。しっかりとした語学力をつけることが文学理解にも不可欠との考え方が学科創設以来徹底しており、専門に係わらず語学を重視する姿勢こそが青山学院大学フランス文学科の大きな特徴と言えます。

大学院はフランス文学・語学専攻ですが、ここでも上で述べた姿勢は一貫しており、文学を専門とする（あるいはしようとしている）者も語学を大事にし、またに、語学をやる者も文学や哲学などの授業にも出て、言葉のもつ大いなる力に触れるようにしています。語学・言語学関係では、例えば今年度、次のような授業が開かれています。「カテゴリーと語彙の意味構造」（鳥居）、「発話行為の言語学」（ドルヌ）、「統辞機能とは何か」（渡瀬：非常勤）（なお、尾形は今年度開講せず）。その他、中世文学・語学（西澤）の授業も開講されています。

入学試験は、博士前期課程は秋（10月もしくは11月）と春（2月）の2回、博士後期課程は春（2月）のみ行われます。入学試験の詳細については大学院事務室（03-3409-8111 内線2146）までお問い合わせください。（鳥居 正文）

東京大学大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻

フランス語学は、東京大学全体では、文学部フランス語フランス文学（および大学院人文社会系研究科）、教養学部後期課程フランス科でも専攻できますが、ここでは、特に言語情報科学専攻大学院について紹介しておきます。

言語情報科学専攻の歴史は浅く、今年始めて博士課程修了者を出し、同時に、定員8名の後期課程が発足しました。内部は、大きく5つのブロックに分かれています（言語科学基礎理論、言語情報解析、国際コミュニケーション、言語態分析、言語習得論）。修士課程定員は30名、博士課程定員は24名。フランス語専攻の学生は毎年5～8名程度が入学し、その内、語学は2名程度。授業は、東京大学すべての大学院の授業を受けることができ、また学部の授業も8単位まで認められるので、選択の幅はきわめて広がっています（フランス語学、フランス語実習、フランス文学、言語学、英語学、国語学、コンピュータ言語処理、など）。教官は外国語教官を中心に50名ほど。現在では、教養学部の語学専門の教官はすべて言語情報科学専攻に所属しており、認知意味論、生成文法、形式意味論、コンピュータ言語学など、言語学ならなんでも勉強できます。

フランス語教官は6名で、語学専門は坂原のみ。古フランス語、中世フランス語については、語学専門ではありませんが、有能なスタッフがおり、サポートが期待できます。中国語教官クリスティン・ラマールはフランス人で、専門は中国語学ですが、フランス語学にも深い知識があります。フランス語学では統語論、意味論であれば、よほど特殊なことをやらない限り、指導は可能です。最近提出された修論は、時制、前置詞、知覚動詞、代名動詞、照応表現、対照研究などについてです。フランス語学の学生は、修士、博士あわせて10名程度ですが、語学専攻の学生全体はかなりの数に登り、交流は密です。この他、語学専攻の外国人留学生もかなりおり、よい刺激になっています。学生を迎える側としては、何をやりたいかがはっきりしており、ある程度の理論指向性をもつ学生が来てくれればありがたいと思っています

(坂原 茂)

研究会案内

学会の例会以外の研究会の案内です。

フランス語学を一緒に勉強する会

6月からの予定は次のようになっています。興味のある方は是非ご参加下さい。（原則として第2土曜日の3時～6時、慶応大学、三田、大学院棟312教室で開いています）

6月13日(土)

Irene Tamba (EHSS)

「日仏対照の観点から」

7月11日(土)

戸部 篤(筑波大学DC)

「使役構文について」(仮題)

世話人: 川口順二、藤田知子

関西フランス語学研究会

多くの参加者を得てますます盛んな当研究会は、学生の方の参加者も多く、きちんと纏まった発表からまだアイデア段階の発表まで、さまざまな発表を気軽に発表できる場として、夏休みを除きほぼ毎月、おおむね第三土曜日に大阪日仏センターで開催されています。ここ一年間の発表には、つぎのようなものがありました。

~~~~~

1997/5/24 武本雅嗣(山口大学)

「所有者昇格の対格表現と与格表現」

1997/6/21 成田美千子(名古屋大学院)

「現代フランス語の否定文におけるneの消失について」

1997/7/19 近藤 由佳(関西学院大学院)

「quand meme と meme si」

1997/9/20 上田誠人(大阪外国語大学院)

「前置詞 pour の継起・結果用法について」

1997/10/25 延原恵美(大阪外国語大学院)

「文学の中に見る半過去」

1997/12/27 藤巻香代(関西学院大学院)

「il n'est pas probable que P について」

1998/1/31 谷口千賀子(関西学院大学)

「d'une maniere + adjectif と -ment の副詞について」

1998/2/21 藤田康子(関西学院大学)

「X avoir Y の意味構造」

1998/3/28 新比恵智子(大阪外国語大学院)

「sembler と paraître の意味的差異について」

1998/4/18 Frederique Lab (Paris VII)

「Deux applications de la theorie des operations enonciative」

1998/5/23 小田涼(京都大学大学院)

「フランス語のコピュラ文について - 属詞位置の代名詞・固有名詞の機能をめぐって」

~~~~~

またこの会は、研究発表ばかりではなく、さまざまな情報交換の場としても機能しています。例会案内は必ず frenchling で流れますが、葉書での案内をご希望の方は、福島祥行(大阪市立大学文学部: fukushimアットマークlit.osaka-cu.ac.jp)までご連絡下さい。(福島 祥行)

海外大学言語学事情

グルノーブル第3大学

グルノーブル第3大学は、名古屋大学、天理大学などと次々に学術交流協定を結んでおり、日本人研究者や留学生の受け入れにも大変積極的です。

言語科学科(Sciences du langage)には現在9名の指導教授がおり、統辞論、音韻論から社会言

語学，言語教育法，言語地理学，言語の機械処理に至る幅広い専門分野をカバーしています。

記述，対照言語学の講座担当の Mireille PIOT 氏は，御自身もフランス語の他，英語，ドイツ語，フランス語に堪能で，生成文法を基盤とする独自の立場から印欧語の統語分析を行っています。彼女はパリ第8大学でも教鞭をとっており，対照研究に関心を持つ様々な母国語を持つ学生に指導を行っています。

また言語地理学の講座担当の Michel CONTINI 氏は，北部オック地方を中心に，主に語彙面と音声面における方言分析を行っています。博士論文の指導では，学生に言語地図作成の方法論を教授するとともに，具体的な実地調査によるデータの収集と整理も課しています。

その他の主な講座には，外国語としてのフランス語：J.-P. CUQ，音声学と言葉（パロール）：L.J. BOE，書き言葉の機械処理：G. ANTONIADIS，などがあります。

（奥田智樹 名古屋大学）

編集後記

今年も日本フランス語学会の『ニューズレター』第6号を無事お届けすることができました。このニューズレターは編集委員会と会員の皆様をつなぐ掛け橋となるものです。内容についてご意見などがおありでしたら，最寄りの編集委員までお寄せください。今後とも皆様のご協力によりこのニューズレターが学会活動の充実に役立てるよう努めていきたいと考えています。

この号の編集は木内良行（大阪外国語大学）と東郷雄二（京都大学）が担当しました。